

いみ
30

「青信号」なぜ緑色？

青信号あおしんごう

青信号はよく見ると、青でなく、緑色のものが多いようですね。なぜ「緑信号」と言わないのでしょうか。

古代の日本語には、色を表す言葉は、赤・黒・白・青だけしかありませんでした。この四つはどれも直接「い」を付けて、「赤い・黒い・白い・青い」と言えます。「赤々・黒々・白々・青々」と繰り返す言い方も作れます。緑や黄などは、「緑い」「黄々」とは言えません。そんなところからも、赤・黒・白・青が基本の色の名前だったと分かります。

青はねずみ色や緑色を含む広い範囲の色を指して使われていたのです。「青葉」「青ガエル」「青々と茂る」のように、緑色を青で表す言い方は今も残っています。

緑はもともと、草木の新芽を指す言葉でした。赤ちやんを緑児と言います。これは、新芽のような若々しさをたとえた表現です。つやのある美しい髪を緑の黒髪と表すのも、みずみずしい新緑の様子からです。緑と黒に染め分けられたわけではありません。



明暗の違いを表した「赤・黒・白・青」

青物あおもの

青田あおた

青柳あおやなぎ

青と言いつつながら青でないのは信号機だけではありません。大相撲の土俵の四隅に下がっている色房（四房）は、青竜、朱雀（鳳凰＝赤）、白虎、玄武（亀と蛇の合体＝黒）と呼ばれ、それぞれ東北、東南、西南、西北の方位を表していますが、青竜の青房は緑に近い色が使われています。

日本語の色を示す言葉「赤・黒・白・青」はもともとは色彩というより、光の明暗、濃淡を示すものだったとされています。

赤は「明（あか）し」、黒は「暗（くら）し」から来ています。白は「著（しろ）し」で、はっきりしている、青は「淡（あわ）し」で、「ぼんやりとしている」の意です。

最も古くから用いられてきた四色ですが、これが基本色というのは世界共通ではないようです。欧米の言語では、まず白・黒・赤が、続いて、緑・黄が使われ、青はその後に出てきたと言われます。色の名前が生まれた順序が、日本語とは違うのです。欧米で誕生した信号機が、赤・黄・緑の組み合わせになっている理由には、そんな事情も絡んでいるのかもしれない。

